今年も省農薬ミカンをお買い上げいただきありがとうございます。

【配送ラベルの確認を！】
配送されてきた段ボールに貼り付けられている配送ラベルをご確認ください。茶封筒が間に挟まれており、その中に請求書もしくは贈り状が入っています（大学でのお渡し、またはゼミ員による配達でお渡しした場合は、茶封筒は挟まれていません）。

【ミカンを長持ちさせるために】
箱の中のミカンを一度全部新聞紙の上に広げて、一晩ほどそのままにして余分な水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しの良い所で保存してください。また傷んだミカンが見つかりましたらすぐに取り除いてください。

巻頭言

石田紀郎

最高気温が32℃程度なら楽な一日だが、今年は連日35℃以上に曝された夏である。ニュースレターの原稿は、例年9月末頃が締め切りなのだが、今年はミカン山の事情が大きく変わったため、安全を見越して8月末日締め切りとなった。遅れないようにという編集係からの指示もあり、猛暑の中で書いている。台風の大雨に苦労をしている地方もある。愛媛のミカンどころ宇和島市では急斜面のミカン山が崩落し、ミカンの成木が無惨にも根をさらけ出していた。復興するかどうか心配であるが、他所のミカン山を心配する余裕が当方にはない。

すでにご存知の方もおられるだろうが、この1年の間に省農薬ミカン園に起こった出来事を報告したい。5年前に我が省農薬ミカン園のオーナーだった仲田芳樹さんが亡くなられたが、それ以前から息子の仲田尚志さんが芳樹さんのあとを継いでミカン農家に専念されていた。省農薬園も他の園も引き継がれて、尚志さん流のミカン栽培方式を確立すべくいろいろな試みをされているのを見て、省農薬栽培の新たな歴史に参加できることを喜んでいた。2017年度の出荷が完了し、あとは1月の正月明け出荷準備だけとなり、12月27日に農薬ゼミの担当者が電話を入れ、「よい年を」と挨拶して、京都の作業も終えた。1日置いて29日の朝に、尚志さんの息子さんから「今朝、大窪の家で父が亡くなっていました」と電話をもらった。何がどうなるのかを理解することもできないままに年末年始を過ごし、年明けに仏前にお参りをさせていただき、御遺族と話をして、省農薬ミカン園の今後に取りかかれたのは2月に入ってからだった。

▲2017年11月3日　悟の家にて、後列一番左に尚志さん

▲2018年7月1日　省農薬ミカン園にて、農薬散布作業前の集合写真　後列中央に大窪のミカン農家の上山さん

私たちは暗黙のうちに省農薬ミカン園を継続するのだと意を決めて後継者探しに入った。農薬ゼミOBには尽力いただき感謝している。以前の農村であれば、村人か親戚が、それなら後継者が見つかるまでこの園の面倒を見てやるよと、誰かが名乗り出てくれただろうに、今の日本の農村にはその力がない。放棄園だらけのミカン産地だから仕方がない。3名の方が手を上げてくれたが、後述するように、大阪在住の新規就農者に後継してもらうことになった。この間、省農薬ミカンを販売している生協、NPOと農薬ゼミが話し合い、今後も協力していくことを確認しあった。また尚志さんの親戚や、同じ下津町で農薬を減らした栽培をしている農家が、後継者の助けをすると言ってくれた。更に、20年ほど前に省農薬園で技術を学び、三重県でミカン栽培を続けている方も来てくれ、支援してくれた。農薬ゼミも毎月1回は園に出向き種々の作業に従事している。仲田親子におんぶにだっこ状態だったゼミ生も、今年は新規就農者の助っ人として活動している。

当分は新規就農者と農薬ゼミとの共同作業ミカン園として、省農薬ミカン栽培に知恵と力を注いでいくつもりである。ミカンを買っていただいている方々、ゼミのOBOGの皆さんもお力添えをお願いします。今年の秋には、これまで同様、省農薬ミカンを収穫し、仲田親子の霊前に供えられるよう、ゼミ一同頑張っていきます。

いしだ　のりお

お召し上がりの前に

この度は、省農薬ミカンをお買い上げいただきありがとうございます。皆様に美味しくミカンを召し上がっていただくために、心に留めておいてもらいたいことがあります。

①見た目は悪いけれど…

ミカンには黒点病という病気があります。ミカンの皮に点々とある黒いのがそれです。安全上問題ありませんが見た目に劣るため、黒点病のあるミカンは市場にはあまり出回りません。そのため、市販のミカンでは年4回ほどダイセンと呼ばれる農薬を散布してピカピカのミカンをつくります。対して、今年度の省農薬ミカン園ではミカン園を維持する為に最小限必要と思われる、マシン油そしてストロビー、スプラサイドという農薬の混合液を1回散布しました。

②防腐剤を使っていない

私たちの省農薬ミカンは防腐剤を使っていません。防腐剤がなくてもきちんと保存をすればミカンは長期間食べられますし、ミカンの皮を料理や入浴剤に使われる方にとっては防腐剤が入っていない方が気持ちがいいのではないでしょうか。傷まないように気をつけながら保管・出荷を行っていますが、皆様に届いたミカンのいくつかは既に傷んでしまっているかもしれません。それでも、それを省農薬の「こころいき」と捉えて下さったならば、私たちとしては本望です。できるだけおいしい状態でお送りするよう努力していますが、ご期待に沿えなかった場合はご容赦願います。

目次

巻頭言	石田紀郎	2
お召し上がりの前に		3
【2017年ゼミ報告】		
調査報告	奥村颯斗	4
アンケートについて	森田康裕	5
えひめAI報告	菅野伸哉	6
旅先寄稿	内藤聡	6
2017年のゼミ活動報告		7
【40周年企画】		
経過	和泉賀津子	8
企画スケジュール	藤井黎	9
感想文		9
【仲田尚志さん追悼】		
尚志さんミカン農家人生	森田康裕	13
追悼文		14
【大柿肇さん紹介】		
新たな生産者との出会い	河原田涼太	18
挨拶文	大柿肇	19
省農薬ミカンとは		20

段ボール側面にある配送ラベルの中のご確認をお願いします

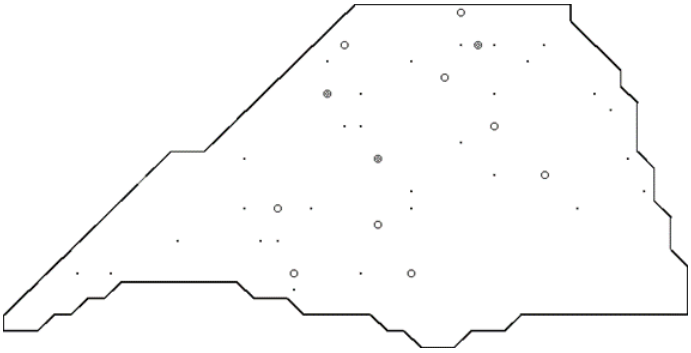
ミカンを一晩ほど風通しの良い場所で新聞紙の上に広げることで、傷みにくくなります

病害虫調査報告と使用農薬

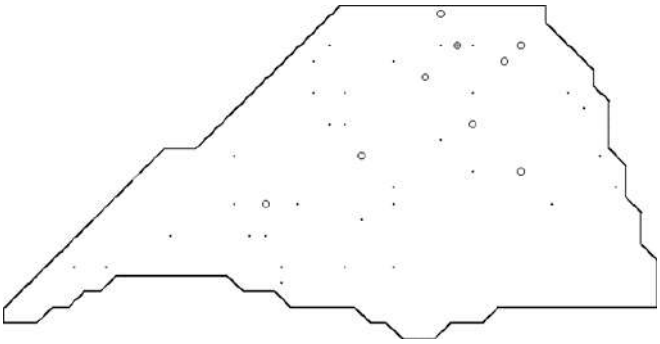
奥村颯斗

私たちの省農薬ミカン園では、農薬を減らした農業は可能であることを示すため、また、今後の病害虫対策に役立てるために、毎年8 月と10 月、調査園にある約 400 本のうち 50 本の木を調査木として調査を実施している。ここでは昨年10 月と今年8 月の病害虫調査の報告をする。

【ヤノネカイガラムシ発生状況】



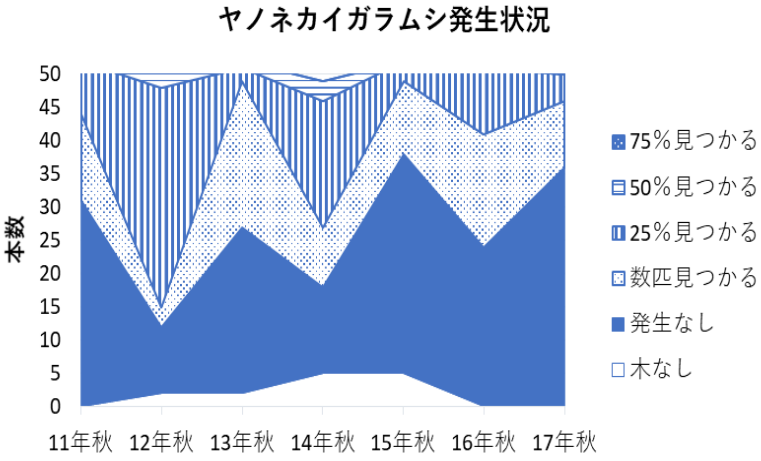
2017 年　10 月



2018 年　8 月

※図中の・印は発生が見られないこと、○印は少量に発生が見られること、●印はより多く発生が見られることを示す。

昨年秋、今年夏はヤノネカイガラムシの発生は低く少々比較しづらいが、2018 年8 月にヤノネカイガラムシが観測された 9 本のうち 7 本は前年秋も観測されていた。



※凡例の%は、発生の見られる単位枝が全単位枝の何%を占めるか表す

一昨年より、ヤノネカイガラムシの発生動向をグラフにしている。一昨年、昨年のグラフから、ヤノネカイガラムシの発生は一年周期で増減し、ミカンの隔年結果と逆周期なのではないかという仮説が生まれ、現在も調査を継続している状況である。

17 年秋はヤノネ発生が 13、15 年同様少なく、仮説通りヤノネカイガラムシの“裏年”の兆候を示している。

【2018 年省農薬ミカン園使用農薬】

7/1	マシン油 200 倍希釈、 ストロビー2000 倍希釈 スプラサイド1500倍希釈 計 1800L

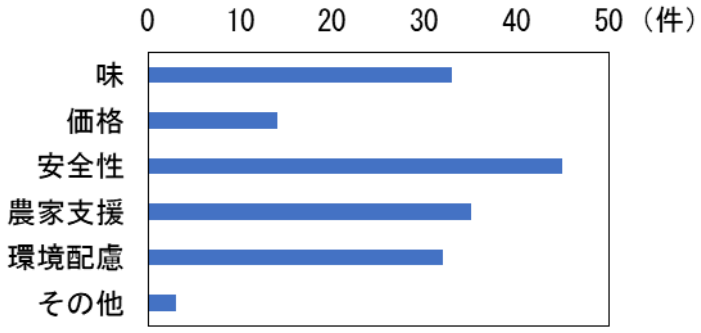
今年は農薬を購入する費用の問題もあり、仲田さんから大柿さんへ園を引き継いだこの一年は、園を維持できると思われる最小限の農薬を散布することに決めた。散布は大窪農家の上山さんの指導の下、大柿さんと農薬ゼミメンバーを中心に行った。除草剤は散布せず、手作業で除草を行った。

農　食料・環境経済学科　3回　おくむら　はやと

2017年度省農薬ミカン アンケート報告

森田康裕

昨年度の省農薬ミカン アンケートでは52件の回答をいただきました。多くの方々にご協力いただき、ありがとうございました。以下に集計結果の報告をさせていただきます。



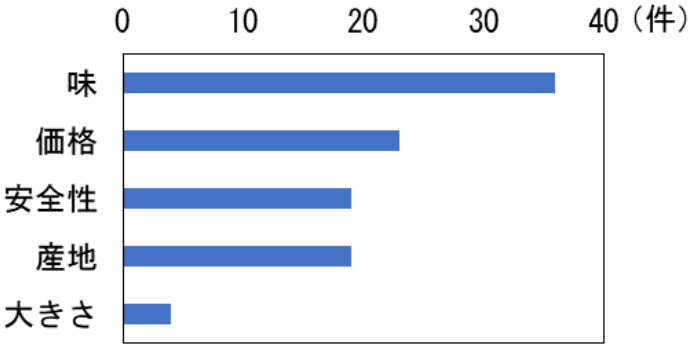
省農薬ミカンへの関心

１．ミカンの到着日

出荷日から考えると概ね2日以内に配送されていることがわかりました。

２．傷んだミカンの個数

傷みミカンの個数は、0個だったのが約半数の27件、1個以上が25件で平均2.5個でした。



一般のミカンの選び方

３．省農薬ミカンが好みの味だったか

ほとんどの方に好みに合う味だったと回答いただきました。一方、好みに合わなかった理由としては、酸味の弱さや味の薄さへの言及が多かったです。

４．省農薬ミカンのどの部分に関心が高いか

安全性への関心が最も高く（90 %）、次いで農家支援・味・環境配慮が同程度に高い関心を得ていました（70 %）。一方、価格への関心はあまり高くありませんでした（30 %）。

５．一般のミカンを購入する際に重視すること

味が最も多く、価格・安全性・産地と続きました。

６．省農薬園での除草剤の使用に関して

反対と容認の意見をどちらもいただきました。反対の立場としては、食物としてのミカンの安全性に気を配ってほしい、除草剤に頼らない方法を模索してほしい、という意見をいただきました。容認の立場として、自身の農作業の経験から除草剤の使用へ理解を示す、これまでの信頼に基づき農薬ゼミと生産者に使用方法を一任する、という意見をいただきました。

他にも、多くのご意見やメッセージをいただきました。これらはゼミメンバーと生産者で共有し、活動の励みとしていきます。本年度の省農薬ミカンアンケートも何卒ご協力よろしくお願いします。

農　応用生命科学科　4回　もりた　やすひろ

えひめAIの散布実験

菅野伸哉

昨年のニュースレターにて、イースト・納豆・ヨーグルトから作る発酵液『えひめAI（あい）』を紹介しました（詳しくはNews Letter Vol.29をご覧ください）。えひめAIには、農作物への散布でカビが抑制されたという報告があります。これが本当なら農薬（殺菌剤）の代わりとして使えるかもしれません。そこで、えひめAIの散布はミカンの青カビや黒カビなどにも効果があるのか実験しました。

昨年2・5・8・10月に調査園内の2本の木にえひめAI希釈液を散布しました。比較のため、水・お酢希釈液（えひめAI希釈液と同じpHの溶液）もそれぞれ２本ずつに散布しました。11月に、それぞれの木から果実を回収しました。それらを室温にて放置し、カビの生えてくる時期を確認しました。放置後1か月は水・酢・えひめAI散布のいずれのミカンでもカビが生えてこず、その後徐々にカビが生え始めました。細かな観察ができませんでしたが、カビの生えてくる時期はあまり変わらなかったように思います。

今回の実験は結果が曖昧でした。今後は、やりやすい実験にする試行錯誤が必要です。例えば、あえて傷をつける、または高めの温度に置くなどの処置でカビの発生を早めて、短期間の観察でカビ発生のタイミングを見逃さないような工夫をしていくつもりです。最後に、えひめAI散布に協力してくれたゼミメンバーの皆さまに、御礼申し上げます。

農　応用生命科学専攻 修士1回　かんの　しんや

▲2017年2月28日　散布の様子

旅先寄稿

内藤聡

私は今、フィリピンのアラバト島に来ています。マニラの南西に位置するこの島の、ペレーズという町で、〆切に追われています。

ペレーズは人口3000人の小さな町。住人は漁業、農業(米、野菜、ココナッツ、バナナなど)を行なったり、小さな商店を経営したりして生活しています。

町はジャングルに覆われ、海にはマングローブが生えていて、空気はキレイで、星空満天の自然が豊かなところです。

文章を読んだ限り、不便だけど、のんびりとしたいい島だな、と誰もが思うでしょう。仮に訪れたとしても、観光で行ったならそう思うでしょう。

しかし、現実はそう甘くありません。住人の多くは非常に貧しく、食事に困る事もあります。何故なら彼らの漁業や農業は下請けの下請けに過ぎず、十分な収入を得られないためです。彼らの使う網の1つ1つ、彼らの収穫するココナッツの木1本1本まで、彼らのものではありません。彼らは言わば小作人です。それらの所有者は、マニラなど島外に住んでいます。また、生産者である島民が受け取る労働の対価は、適正とは言えません。

物凄く端折りますが、生産の現場は今回のように様々な形で、個人、企業、国に搾取されているのが現状です。生産者から消費者の元に直接届くこのみかんは、こうした現状を変えていく形の一つだと思います。そういった意味でも、私は、省農薬みかんを大切にしていきたいと思います。

農　資源生物科学科　3回　ないとう　さとる

2018年のゼミ活動報告

1/12	通常ゼミ「いま地球には不気味な変化が起きている」（内藤）
1/26	講演「日本農業の将来を考える視点」（農薬ゼミOB 可知さん）
2/9-11	冬のみかん山
2/18	里守隊体験
4/6	新歓企画①　みかん蒸しパン作り＆プチゼミ
4/13	新歓企画②　みかんジャム作り＆プチゼミ
4/20	新歓企画③　みかんケーキ作り＆プチゼミ
4/27-29	新歓みかん山
5/11	通常ゼミ「土壌汚染」（長瀬）
5/18	通常ゼミ「『名著』を読む～銃・病原菌・鉄～」（奥村）
5/19-20	除草作業
5/25	通常ゼミ「BLOF理論【アミノ酸肥料編】」（藤井）
6/1	通常ゼミ「卸売市場法改正について」（森田）
6/8	通常ゼミ「日本は農業大国なのか？」（内藤）
6/15	通常ゼミ「オーソモレキュラー療法」（河原田）
6/22	通常ゼミ「果実に潜む害虫をいかに見つけるか」（菅野）
6/29-7/1	農薬散布
8/3-5	夏調査
8/31-9/2	摘果作業
10/12-14	秋施肥
10/19	ゼミの振り返り
10/26-28	秋調査

▲4月20日　プチゼミ

▲6月30日　農薬散布

今年の通常ゼミはゼミメンバーそれぞれが興味を持った事柄について勉強会を行いました。また、例年に比べてミカン園での作業が多くなっています。

▲9月1日　枯れ木の除去

▲10月13日　秋施肥

【40周年企画】

経過

和泉賀津子

昨年のニュースレターで予告した農薬ゼミ40周年企画は、思った以上にたくさんのOBOGが、家族と共に集まってくれ、大盛会だった。

昨年も書いたが、仲田芳樹さんがお元気なうちに懐かしい人たちにミカン山に集まってもらい、芳樹さんを囲んで想い出話に花を咲かせようという話は、芳樹さんが亡くなられる数年前から出ていた。しかし中々実現に至らず、長年の懸案事項となっていた。そして昨年ゼミに提案し、やっと実現することが出来た。

農薬ゼミの現役メンバー達は、自分達が生まれるずっと前から続いているゼミの長い歴史を掘り起こし、参加してくれるOBOGに向けた資料作成に取りかかった。短期間で40年間の経過をまとめ、写真を整理し、名簿を作成した。本当に大変な作業だったと思う。

OBOGに企画参加の案内を送ったところ、すぐに何人かから反応があり、最終的には予想をはるかに上回る人数の参加があり、現役メンバーの苦労は吹き飛んだにちがいない。

▲2017年11月18日、40年まとめ報告

農薬ゼミ40年の歩みをまとめるといっても、どのような形で何を伝えるかという検討から始まり、また資料があまり残っていない時期もあったりして、困難を極める作業だった。そして出来上がったものを大先輩達を前に報告するために、何度も何度もプレゼンの練習を繰り返し、当日に臨むというなかなかの力の入れようだった。ミカン山では、緊張しながらもその報告を行なったが、参加した多くの人達に、それぞれが関わったミカン山を思い返してもらえたのではないかと思う。そして彼らから色んな意見をもらうことも出来た。

私はと言えば、悟の家に各世代のゼミ生が混在している光景を目の当たりにし、これは本当に現実なのかと思うくらい、不思議な感覚に包まれた。そこには学生時代と変わりない笑顔が溢れていた。嬉しいという気持ちと同時に、泣けてくるくらい感動的で幸せな時間だった。

参加した人達の中には、既に定年退職を迎えた人、子育てに奮闘している人、働き盛りの人、などなど、皆社会人となり、それぞれの人生をしっかり生きていた。彼らの目に現在のミカン山はどのように映ったことだろう。ゼミメンバーが変わっても、省農薬ミカンの調査は続けられ、途切れることなく省農薬ミカンを届けて来られたのは、彼らの力が引き継がれてきたからに違いない。

▲26日、ミカン園にて脇田さん親子

これを機に、今回参加してくれた人も、残念ながら参加出来なかった人も、大学卒業後遠くなっていたミカン山がまた近い存在となり、気軽に行ってみようと思ってもらえたら嬉しい。ぜひぜひまたミカン山に足を運んでほしいと思う。

いずみ　かつこ

スケジュール

前半11/17-19

OBOG：池田里絵子、井上裕靖、高杉晋一郎、富山博喜、西岡孝明、日高渉、松田史生、松村俊和、宮川功、山内学（敬称略）

17日の夜はOBOG3人と悟の家に前泊。18日はあいにくの雨でミカンの収穫は満足にできませんでしたが、OBのお子さんが元気に餅つきや芋掘りをして和気藹々。19日は尚志さんに教わりながら収穫をお手伝いしました。

▲19日、解散前に収穫の手伝い

後半11/22-26

OBOG：浅井元朗、新井直子、市岡孝朗、宇治野徳子、江成卓史、岡林裕子、奥田郁夫、可知祐一郎、酒井章子、白坂雅子、都野展子、中川ユリ子、永光輝義、中屋敷均、西出香、西原啓史、藤岡和佳、古川良子、宮崎朋子、山崎香織、脇田千鶴（敬称略）

後半の参加者第1号は初期メンバーの可知さん。24日は西出家族が３世代で収穫と餅つき。25日は最多人数で現役メンバーは大混乱でしたが、皆懐かしそうに話していました。26日は昼まで収穫を手伝い解散。

▲23日、可知さんと集合写真

▲18日、集合写真

▲24日、集合写真

8日間でOB31名、総勢63人が参加してくれたこのイベントは、OBOGの方にも楽しんでいただけたようです。

【OBOGからの感想】

イベント後にいただいたメールをご紹介します。

▼二十年ぶりくらいのミカン山でしたが、変わったこともあれば変わらない所もあって、懐かしい面々と再会できたことは、何より嬉しいことでした。もっと話をする時間があればという気持ちもありますが、何を話せば良いのやら、というのもあり、これで良かったのかなという気もしております。ただ、結論として、歳をとっても人は変わらないものだ、ということを、覚悟と諦観を持って、再認識できたのは良い経験でした。また、変わらぬ面々と再会できる機会があることを願っております。

中屋敷 均

▼ミカン山で石田先生の淹れてくれたコーヒーが石田研で飲ませてもらっていた記憶どおりのコーヒーで、ちょっとびっくりしたと同時に、あのコーヒーは何なんだろうという疑問が湧いてきました。夜な夜なご自分で焙煎してるんじゃないかとか（笑）

新井 直子

▼約20年ぶりの悟の家とみかん園は、とても懐かしかったです。短い滞在でしたが、色々な記憶が蘇りました。息子が何かとご面倒をおかけしましたが、本人はとても楽しかったようです。娘は母よりもちゃんとみかんを収穫していて、みかん園からの眺望がいたく気に入っていました。懐かしい皆様や、現役の若者達に接する機会をいただいて、本当にありがとうございました。

宇治野 徳子

▲24日夕、集合写真

▼先週末は大窪に行けて、20数年ぶりに皆さんにお会いすることができて、とても楽しく懐かしく過ごすことができました。家に帰って写真を見ると、あの頃がそのまま30年くらい経ったみんなの顔がありました。それぞれが各地で、いろんな分野で活躍していることを感じました。ミカン園ではお父様そっくりの仲田尚志さんが黙々と作業していて、まるで芳樹さんがいるようだったことも、いろいろなことを思い出させてくれました。省農薬ミカン園に熱心に向かっていることに感謝します。

江成 卓史

▼ぼーっとしているうちにミカンの樹が立派になり、カイガラムシは少なくなってしまいましたが、なぜ少なくなったのか、少ないままでいれるのかという謎は依然として解けぬままです。また、時間の許す限りお邪魔しようと思いますので、よろしくお願いいたします。

市岡 孝朗

▼石田先生はじめ、懐かしいお顔を拝見できました。和歌山はもっと遠いところと思っておりましたが案外近くて驚きました。一泊しかしませんでしたが、家に帰ったらねこが空のご飯皿のよこで2匹でぼーっとしていたので、帰ってよかったです。市岡さんが悟の家のまえでぼーっと座っていた光景もついこの間のようでしたが。現役学生さんによる発表たいへん興味深かったです。あのデータはもったいないのでなんとかしてほしいです。

都野 展子

▼このたびは、ほんとうにいろいろとお世話になり、ありがとうございました。振り返れば、30年ぶりのミカン園でした。なによりもありがたかったことは、松本さんと仲田さんに、永の不義理をお詫びできたことでした。私事に追われ、お送りすべき方々へのご挨拶も叶わず、忸怩たる日々でした。石田さん、和泉さん、食事のお世話をしてくださったみなさま、そして、貴重な成果報告を聞かせてくださった若手のかたがたに、心からお礼を申し上げます。

奥田 郁夫

▲26日、朝食にて同窓写真

【現役メンバーからの感想】

▼40周年記念企画では、私はミュージックビデオ！？の作成を担当させていただきました。農薬ゼミの40年を代表する写真を集めてスライドショーを作り、そこに音楽を付けた簡単なものでしたが、なかなかのものが出来たと自負しております。

写真集めをする中で、いつまでも変わらない農薬ゼミの姿を目にすることができました。勿論、細かい変化はありますが、みかん山での病害虫調査や悟の家での餅つき、テーブルを囲んでの宴会などは随分昔からあったようですね。メンバーが変わりながらも受け継がれてきた調査の様子を、写真からも見出すことができました。

当日は、石田先生やOBOGの方から昔の話が聞けて

面白かったです。特に、昔は鶏を園で飼っていて、それをさばいて食べていた話とかですね。自分は鶏をさばいているのを見たことすらないので、羨ましい限りです。農薬ゼミには優秀なシェフが多いので、さぞ美味しい料理が出来たことでしょう。

40周年記念企画というだけあって、OBOGのお子さんも沢山遊びに来て下さいました。子供は可愛いし一緒に遊ぶのも楽しいですが、いかんせんこちらの体力も全盛期を過ぎていますので、最後の方はヘトヘトでした。あと、私は小学生の子とトランプで遊んでいる時に『おじさん』と呼ばれて大変ショックを受けました。まだ20歳です。

▲18日、子供達と芋掘り

色々と話題が飛びましたが、楽しく活動しているメンバーや、にぎやかなみかん山の様子をご想像いただけましたでしょうか？これを機に、みかん山から足が遠のいていた方も、みかん山にご興味がある方も、是非足を運んでいただけたらと思います。

農　資源生物科学科　3回　内藤聡

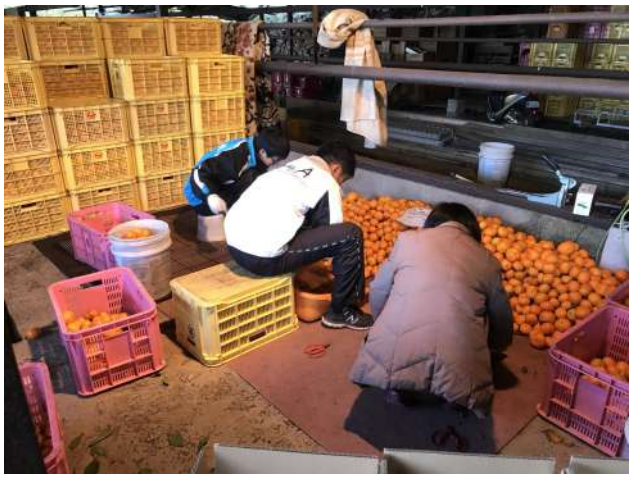
▼40周年企画において、私は前半の献立作りを担当しました。親子連れで収穫に来てくださるOBさんもいらっしゃるということで、「人で賑わうみかん山に相応しい献立はどのようなものだろうか」と楽しみながらメニューを考えていました。作ったメニューの中でも、和泉さんに提案していただいた餅つき、ちらし寿司、そしておでんは皆さまにご好評いただいて嬉しかったです。農薬ゼミに入ってみかん山に慣れてきた1回生の秋、初めて献立担当となり、一食につき大体10人前の献立を考えた時も大変でしたが、この40周年企画が行われるまで、一度に25人分の食事を作った経験などありませんでした。普段は大きすぎて使わないような大鍋2ついっぱいに入った料理が出来上がり、取り分けられて綺麗に消えて行く様は今までにないもので、私をお祭り気分にさせました。昔はゼミ生が沢山いたと聞きますが、当時も大量の料理が作られていたのでしょうか。率先して調理を手伝っていただいた参加者の皆さま、ありがとうございます。野菜の切り方一つとっても各家庭のこだわりが見られて、興味深かったことが印象に残っています。

夜は雨が降ったり止んだり、タープの下で料理を作り、小雨の中みんなで焚き火を囲んだりもしました。大人たちは酒を片手に語り合い、OBさんのお子さんたちは悟の家の中で、ゼミ生をおもちゃにして遊んでいました。私自身は早々に寝てしまったのですが、外の賑やかな様子が伝わってきて楽しかったです。

▲19日、焚火を囲んで語らい

一方、昼間は晴れ間も出て、仲田さんの指導を受けてみんなでワイワイと収穫できました。私は当時収穫を行うのは2回目でしたが、少しでも多くのみかんを取ろうと奮闘しました。ただ、籠いっぱいのみかんを取っても、コンテナに入れるとペッチャンコになってしまうような感覚がありました… 去年のみかん山は豊作で、ヘトヘトになるまで収穫しても、「どれほどのお手伝いになっただろうか」と、仲田さんの苦労が忍ばれました。

後半では、収穫に加えて選果・箱詰めの作業をお手伝いしました。小さすぎる・既に腐っているなど出荷に適さないみかんを除いてダンボール箱に詰め、1箱10kgになるよう調整し、ニュースレターを入れてホチキスで留める、という作業を分担して行いました。実際に選果作業をしてみると、「小さすぎるみかんは取らなくていい」「ハサミで傷をつけな



▲24日、選果作業の手伝い

いよう気をつける」といった収穫時の注意事項が理解できました。これからのお手伝いに役立つ、貴重な経験ができたと思います。

最後になりましたが、みかん山にたくさんの人が集まり、賑やかに語り合う風景が、後の世代まで続いてくれることを願って止みません。次は50周年企画が開催できるよう、新しいゼミ生を増やしていきたいです。このニュースレターを読んで興味を持ってくださる方がいれば、どちら様もぜひ一度みかん山にお越しください。一緒に焚き火を囲んで美味しいご飯を食べましょう。

農　地域環境工学科　3回　長瀬由佳

▲24日朝、集合写真

▼40周年という節目に現ゼミ生、そしてOBOGの皆さんと和歌山県の悟の家で一緒に過ごせたことはとても良い思い出になりました。40周年同窓会を開くにあたり、現ゼミ生の皆さんとこの同窓会の準備をする中で、今まで保管されてきた農薬ゼミの過去の資料を拝見しました。そこには40年間絶えることなく続いてきた農薬ゼミで、ゼミに参加する方々が、ミカン園に関すること、ミカン栽培に限らず農業全般に関すること、また病害虫防除や、除草についてなど様々な視点から勉強されていた事が記録されていました。害虫防除の手法のひとつとしての天敵導入の話など、私が学生だった頃は全然知らなかった農薬ゼミの歴史を知る事ができ、この様なすばらしい機会に恵まれた事を大変嬉しく思います。

▲23日、調理風景

今回私は40周年同窓会に後半5日間参加させて頂きました。この5日間で調理係を担当致しましたので、そのことについて書こうと思います。私が調理係を元気よく引き受けたのは良かったのですが、何を作るかはノープランでした。私が担当した後半では、前半好評だったもちつきと、和泉さんが提案してくださった牛テールスープを使った料理の2つの案をいただいていました。私1人では到底思いつかなかった料理だったのでこの様な案があり内心ほっとしました。メニューを考えていた時にはそこまで気を遣えなかったのですが、振り返ってみると、昔のみかん山メニュー（今回の牛テールスープなど）は同窓会の為に準備された写真や資料などの視覚からだけでなく、味覚、嗅覚からも昔の思い出を振り返っていただくためにはとても良かったのではないかと感じました。OBOGの皆さん、如何だったでしょうか？

▲24日、西出一家と餅つき

調理をしていた時間は大変ではありましたが、とても楽しかったですし、何より牛テールを煮込みながらOBの方、現ゼミ生の方と焚き火にミカンの木を焚べながら、その火で手を温めて、学生の頃の話や、ミカン調査で雑草の調査をしていた時の話をしたのがとても楽しく心に残りました。農薬ゼミの資料を見るだけでは分からない調査の大変さや続けることの苦労を改めて感じ、40年間続いてきたゼミ生による調査は本当に貴重な宝だということを再認識しました。そしてこれから先もずっと続いてくれることを願ってやみません。

飯塚益美

【仲田尚志さん追悼】

省農薬ミカンの栽培に取り組んでこられた仲田尚志（なかたたかし）さんが、去年の12月にお亡くなりになりました。

尚志さん
ミカン農家人生

森田康裕

仲田尚志さんは初めからミカン農家だったわけではない。大窪で生まれ育った尚志さんは、しかし、大阪の企業に就職し、大阪で家庭を設けた。

転機は父芳樹さんの「帰ってきてくれへんか」という言葉だったという。当時、尚志さんは50歳手前、芳樹さんは70代半ばだった。

ミカン園引継ぎを決意した尚志さんは2008年にようやく退職が叶い、大窪へ単身赴任の形で戻ってきた。

1年間芳樹さんにミカン栽培を習った尚志さんは、その後自分流のミカン栽培を模索した。肥料の選択、摘果や剪定の方法など、熱心に研究されていた。この熱意の源泉は「美味しいミカンを作りたい」というところにある。

省農薬園を拓いて以来、カイガラムシの猛威から木を守ることで手一杯だった。しかし、尚志さんが引き継ぐ頃には、天敵導入などの様々な試みの結果、被害の程度は十分に抑えることができていた。これにより、園の維持だけでなく、消費者が食べることにも意識を向けられるようになった。安心して食べられるだけでなく、美味しいと喜んで食べてもらえるミカン作りが始まった。

それから、10年。ミカンは変わった。それは、食べた人にも明らかだった。アンケートでは年々甘くなっているというコメントが多く寄せられている。

さらなる試行錯誤に意欲を見せていた尚志さんだったが、昨年末、61歳の若さで急逝された。気管支管出血だったという。

尚志さんの研究熱心な姿勢は確実に私たちに影響を与えた。省農薬園を新たな生産者を迎えて再出発するにあたり、私たちはその研究者魂を引き継がなければならない。

農　応用生命科学　4回　もりた　やすひろ

仲田尚志さん 追悼文

菅野伸哉

～仲田さんのミカン、

人生で一番おいしかったです！～

仲田さんのミカンには魔力があったんだと思います。

少なくとも、僕を農薬ゼミに引き込むだけの。みかん山に向かわせるほどの。

このご時世、甘いミカンがもてはやされます。でも、仲田さんのミカンは、ただ甘いだけじゃない。甘くて酸っぱくて濃い、ミカンらしさ満載の果汁が口いっぱいに広がる。食べだしたら、止まらなくなるミカン。

仲田さん、父親の芳樹さんとは違う、ミカンへの思いがあったんですよね。

「黒点※がついて、見た目は悪くても、おいしさで勝負したい」って。

今の農業では、ほかの人がなかなかできない「省農薬」ってだけで十分有難みを感じるのに、さらにおいしくしようって向上心、尊敬しています。それでいて、10キロ2,700円で、よかったのでしょうか？お安く買えるのはありがたい限りですけど。前の冬は、ひとりで4箱も買ってしまいました。友達や家族に配ると、すごく喜ばれますもん。みんな、おいしいって。

おいしさの秘訣は…海藻エキスのケルパックとカキ殻入りの苦土セルカ。それと、枝の整え方も、「切り上げ剪定」でしたね。もっとあったと思いますが、思い出せない・・・。おいしくするために様々な工夫が凝らされていて、訪れるたびに新たな工夫を伺って感動していました。仲田さんが栽培について勉強されていた川田健次さんの本、読もうとしたけど難しくてわからなかったです。木の枝に、あんなに多くの種類があるなんて。聞いておけばよかったです。教えてほしかったことといえば、もうひとつ。ソフトボールのピッチングって、どうしたら上達しますか？実は、ミカンを収穫するときの片手取りの手の形がボールの上手な握り方？なんてことありませんよね。

ミカンの販売では、何度もご迷惑おかけしました。年始はいつも、注文が多くて（箱数の都合で注文をお断りした方、すみませんでした）。注文が舞い込むのは、仲田さんのミカンがそれだけおいしいってことですからね。出荷日も、他団体の分も用意してぎりぎりのところ、無理言ってすみませんでした。電話口で、いつも最後に優しく「ありがとう」って言っていましたが、こちらこそ「ありがとうございます」です！いくら言っても、足りないくらい。

感謝したいのは、販売だけではありません。いつもみかん山で、僕たちを見守ってくれていましたね。僕が自転車で単身、悟の家に伺ったとき、冬で水道管が凍結したというので、飲料水やストーブを準備してくださっていたり、あくる日すぐに水道管を修理してくださったり、本当にお世話になりました。

お世話になりっぱなしで仲田さんへの恩返しは、まだまだできていないです。もう、直接お返しはできませんが、仲田さんの省農薬ミカン園、大柿さんと受け継いで、ミカンのお返しをしたいです。空から、おいしいミカンが実るように見守ってください。おいしいミカンの大事な秘訣、わかりました。大切に見守ること、ですね。

※黒点とは…ミカンの主要病害の一つ。果皮に黒い斑点ができる。

農　応用生命科学専攻　修士1回

▲2017年2月27日　尚志さんと「切り上げ剪定」の説明を受けるゼミ生

藤井黎

2015年の夏、私は省農薬ミカン栽培を始められた先代の仲田芳樹さんの御仏壇に手を合わせた。「これからミカン園に、そして息子の尚志さんにお世話になります。」そう心に込めたことで、京大農薬ゼミの一員になった気がしたことを憶えている。

それから3年も経たずして、尚志さんの御仏壇に手を合わせることになろうとは、まったく予想だにしていなかった。

尚志さんが皆に優しく、仕事に正義感をもって臨んでいたことは疑いようもないだろう。私たちがミカン園を訪れるたびに、宿泊場である「悟の家」を万全に使えるよう点検し、温かく歓迎してくれた。注文販売の時期、こちらのトラブルで無理を言っても、何も言わず発送の対応をしてくれた。私の知る短い間だけでもお世話になったことは数えきれず、また尚志さんの笑顔はいつまでも脳裡から離れない。

亡くなってからというもの、どうにか省農薬ミカン園を存続したいと活動を続けてきたなかで、ひとつの思いが私の内を駆け巡っている。それは、私たちは尚志さんに甘えてきたのだという思いだ。その考えは、ミカン園に赴くたび、日に日に強さを増している。

省農薬ミカン栽培の標語である、「つくる人にも食べる人にも安心、安全。」私たちはこれをさも当たり前の商品コンテンツのように扱ってきたのではないか。それなりの理解をもとにその標語を使ってきたつもりではあったが、「つくる人」を失ったとき、それはあまりにも虚しい。

今年、省農薬ミカンは後継者の大柿さんとともに再出発する。これからは、より生産者に寄り添った活動を展開していかなくてはならないという使命を感じる。現役のメンバー、これからのメンバーとその気持ちを共有し、長く省農薬ミカンが続くよう取り組んでいきたい。それが、お世話になりっぱなしだった尚志さんへのお礼になればと思っている。

農　森林科学科　4回

冨山博喜

私は2006年からミカン山に通い始めました。その頃は、まだ尚志さんのお父さんの芳樹さんも御存命でした。それから数年して、たしか2009年ごろだったと思うのですが、尚志さんが勤めていた会社を早期退職し、ミカン山の後継者になるということで、ご両親と三人で、ミカン山で作業されていたのを覚えています。

ミカン農家をやるよりも、都会で定年までサラリーマンを続けた方が、いろんな意味で楽なはずですが、高齢の両親のことなど今後のことを考えて決断したと語ってくれました。また、農薬ゼミとAコープが、省農薬ミカンを販売してくれるので、生活できるだけの収入はあるから決断できたとも言ってくれました。そのとき、私は、農薬ゼミというのは学生がメインで活動している団体だけれども、研究だけでなく一戸のミカン農家の生活を経済的に支え、また全国のミカンを買っていただいている方々の支援が、省農薬ミカン園を維持しているのだと実感しました。

その後、2010年～2016年の約七年間は、私が東京で就職したこともあってか、ミカン山には一度も行くことができず、尚志さんと会うことはありませんでしたし、農薬ゼミのメンバーと会うこともほとんどありませんでした。それが、2016年に香川県へUターンしたため2017年から、またミカン山に通い始めました。石田先生や尚志さんと再会し、現役メンバーとも交流が始まり、ゼミ活動の新しい取り組みも聞くことができました。

2017年の夏には、尚志さんに教えてもらいながら、動力噴霧器でマシン油を散布する体験をさせてもらいました。体験だったので実際に散布したのは水でしたが、散布中に噴霧機のノズルをいじっていたらノズルを分解してしまい、水の勢いで中の部品がどこかへ飛んで紛失してしまったために、噴霧できなくなってしまったのですが、予備の部品があるから気にしなくていいといって笑って許してくれました。その後、11月にミカン山に行ったときは、尚志さんの車で、農薬ゼミOBらと松本さんのお墓参りに行ったり、山の上に立っている風力発電用の風車を見に行ったりしました。風車は眺望が良いため、風車に来たことがない人をよく案内しているとのことでしたが、その日は濃い霧が出ていて、霧の中を風車のブレードが回っているという幻想的な風景でした。尚志さんは、普段はもっと遠くが見えるから、次来た時に、また見に来ようとおっしゃっていたのですが、これが最後になるとは、思いもしませんでした。

その二ヶ月後、年が明けてすぐに、石田先生からのメールで、尚志さんが亡くなられたことを知り、あまりに突然のことに驚きました。これからという時に、残念でなりません。

仲田さんたちの遺志とミカン農園を継いでくれる方が現れるのを祈るばかりです。

農薬ゼミOB　とみやま　ひろき

▲2017年8月4日　後列左から4番目に尚志さん、前列左から4番目に冨山さん

日高渉

仲田尚志さんへの追悼文として文章を寄せさせていただきます。

私は2008年4月から2014年3月までの6年間、農薬ゼミに在籍しておりました。ちょうど尚志さんが芳樹さんからミカン栽培を引き継がれた時期にあたります。

初めて尚志さんにお会いしたのは、正確な時期は覚えていませんが私が学部2、3回生の頃だったと記憶しています。まだ芳樹さんもご健在で活動されていた頃で、尚志さんは大阪の住まいと下津のミカン

園を往復しながら芳樹さんの作業を手伝っておられました。ミカン山の悟の家で夜ご飯を食べながら尚志さんとお話ししましたが、尚志さんは都会的な垢抜けした印象で、学生の私たちにも優しく接してくださる温厚な方でした。

尚志さんがミカン栽培に関わり始めた最初の数年は、知識も経験も少なく手探りの状態だったようですが、皆さんに喜んで貰える美味しいミカンを作りたいという思いで、肥料の与え方や剪定、摘果の方法など試行錯誤を繰り返しながら熱心に工夫されていました。

私が大学を卒業する頃には、「最初の頃は手探りだったけど、最近ようやくミカン作りが分かってきた。ミカン栽培は奥が深くて楽しい。」と言っていたことが印象深く残っています。その時の尚志さんの顔はすっかり日焼けされていて、芳樹さんに少し風貌が似てきているような気がして、やっぱり親子だなと勝手に思っていたことを思い出します。

毎年、ミカンをご購入くださった方からのアンケートを尚志さんにも見ていただいていましたが、今年のミカンも味が濃く美味しかったという感想を多く頂いており、そういった感想を直に聞けて励みになると言っておられました。私たち農薬ゼミの活動で尚志さんと消費者の方をつなげることが出来ていたとしたら嬉しく思います。

昨年の年末に尚志さんの訃報が届いた時は、あまりに急な事に心構えもなく、なかなか受け入れることが出来ませんでした。これから長い間活躍されると思っていただけに、若すぎる訃報を残念に思います。ただ、尚志さん自身は芳樹さんの晩年に後を継ぐことが出来て、そういった点では後悔は無かったのではないかなと想像しています。

私自身は、昨年11月の収穫の時期にミカン山にOB・OGが集まるイベントがあり、私も半日だけ参加しましたが、尚志さんに挨拶するタイミングがなかったことが心残りです。学生時代はお世話になりましてありがとうございました。心からご冥福をお祈りします。

最後に、農薬ゼミの皆さんは省農薬ミカン山を存続させるために日々奔走していることと思います。これからも変わらず省農薬ミカンを楽しみにしていますので、ご苦労も多いと思いますが頑張ってください。

農薬ゼミOB　ひだか　わたる

井上裕靖

～さよなら仲田さん～

昨年の暮れ、私は我が家の大掃除を家の女性たちに任せて、インフルエンザで倒れていた。二十九日の朝だったろうか、スマホの着信があり、取れば石田さんからの電話であった。「仲田尚志さんが亡くなった」　何言ってんの、石田さん。この間会ったばかりですやん。そう言おうとしながら、ふと、思った。ありうる。私も、昨年の春、死にかけたばかりだったのだ。

突発性の胃潰瘍からの大出血で、私は強度の貧血に襲われ、妻がそれを発見して医者に連れて行ってくれたおかげで間に合った。もし私が一人住まいなら、あるいは発見が半日遅れていたら駄目だったろう、とは、担ぎ込まれた救急病院の医者の言葉である。聞けば尚志さんは一人住まいだったそうな。尚志さんは確か私より一歳年下で、ほぼ同じ年であるといっていい。私は熱でモーローとした頭で石田さんの言葉を聞いて、何ともいえないこの現実の重さを噛み締めたのだった。

私は1955年生まれで、今年の七月に63歳になった。農薬ゼミに参加していたのはもう気が遠くなるくらいの昔で、だから尚志さんとはそんなに親しいわけではない。それよりも、お父上の仲田芳樹さんには大変お世話になった。二十年ほど前に関西から地元の高知に帰り、学習塾と兼業で農業を営むようになり、その関係で時々和歌山のみかん山に出入りさせてもらうようになったのは、この数年のことである。

だから尚志さんとみかん山で会っても会釈する程度の関係であった。それでも、不思議なことに、そんなに話をしなくても尚志さんのことはわかる様な気がしていたのである。農家に生まれ（私の家は兼業農家であったが）、近所や親戚の多くは農家であり、したがって子供のころから農薬に囲まれ、農薬に批判めいたことを言おうものなら「あいつは頭がおかしい」と言われる風潮の中で思春期を送り、若くして亡くなる人々を横目で見ながら心の底では「大人になったらここから出なければ」と当然のように思いながら育ったのではないか。

現在の日本人の平均寿命は、男81歳、女87歳だそうだ。私は子供のころ重度の腎臓病になり死の淵をさまよった。その病院では同じような症状の子供がたくさん亡くなった。病院から生還した後も「二十歳までは生きられないかもしれない」と医者に言われた。今もまだこうして生きている事が、時々本当に不思議に思えている。しかし、自分はなぜあの時、あんな病気になってしまったのだろう。後で聞けば、私ほど重症でなくても、同じ病を持った同級生が小学校の同学年50人中3～4人はいたようである。考え過ぎなのかもしれないが、それでも私たちの世代の体の中には、何か、いつ破裂するかわからない時限爆弾が仕組まれているような気がする。日本人の平均寿命が少しずつ延びているのはめでたいことだが、それは私には（私たちには）関係ない、どこか遠い世界のお話のように感じている。

尚志さんは、50代の半ばで、芳樹さんが亡くなった後のみかん山を継いで下さった。それまでは、シ

ステムエンジニアの仕事をされていたそうだ。普通は、父親と一緒に働きながら作業の勘所を覚え、体の使い方を覚えていく。それを全て一人で、ほとんどゼロから始めたとすれば、さぞかし大変だったに違いない。どうしてそのようなしんどい事を引き受けて下さったのだろうか。その事についても、私は尚志さんから聞いた事はない。ここからは、ただ推測するばかりである。

尚志さんは、希望を見たのではないか。都会で勤め人をやるよりも、故郷で農業をしたい、という思いは以前から持たれていたようである。それでも、例え芳樹さんが亡くなったとしても、慣れた勤め人の世界から農業に転進するには何か強い「背中を押すもの」が必要だったはずである。単なる農薬ゼミへの義理だけで、それだけの決意がついたとは思えない。「省農薬のみかん」で生計をたてる、ということが、すばらしい「希望」に思えたからではないか。心も体も農薬に押しつぶされるように生きた過去を持つ者にとっては、それは何とも言いがたい痛快なことなのである。

今、私は心配していることがある。私たちに仕組まれた「時限爆弾」は私たちより若い世代には仕組まれてないのだろうか。私達の時代ほど、強毒性農薬やひどい食品添加物にさらされていないとは思うが、形を変えて仕組まれてはいないか。そういうことを考えるとき、省農薬みかん山の存在はまた、形を変えてさらに世に必要となるのではないか。

尚志さん自身がどこまで意識されていたかは分からないが、尚志さんは二つの「たたかい」をされた。ひとつは、省農薬みかん山を次世代につないだ事である。芳樹さんの農法を引き継ぎながら、エンジニアらしく新しい技術に積極的にチャレンジして、まさに新しい時代の省農薬みかん山に発展させていった。もう一つは、「生き抜いた」ことである。

もちろん、「早すぎる死」には違いない。どれだけ早すぎるかは、ここで言葉に尽くせない。でも、とにかくここまで生き抜いたからこそ、ここまでの仕事ができた。

松本悟さんは若くして亡くなられた。私たち農薬ゼミのメンバーは誰も会ったことがない。だから、尚志さん、まことに失礼なことだったが、私はあなたを見るにつけ、悟さんが生き続けていたらこんな風だったろうか、などと思っていたものだった。

尚志さん、私はあなたともっと話がしたかった。子供のころのことだとか、他愛のない話をもっと。あなたのことは忘れません。尚志さん、さよなら。

農薬ゼミOB　いのうえ　ひろやす

和泉賀津子

昨年末、突然に、本当に突然に、尚志さんが逝ってしまわれた。

農薬ゼミと尚志さんとのお付合いは、まだ10年も経っておらず、これからまだまだ一緒に省農薬ミカンを作っていくはずだった。尚志さんも、70歳までは頑張りたいと言っておられたのに、信じられないことが起こってしまった。

尚志さんがお父さんの芳樹さんから省農薬みかん園を引き継いだ当初、ゼミメンバーがインタビューをさせていただいた時に、「ミカン園のことは、和泉さんの方が良く知ってるやろ」と言われたことがあった。その時は、「そうやけど」と思わず言ってしまったが、尚志さんはこれからどんなミカンを作っていくか迷っておられた時期だったのではないかと思う。

しかしその後、尚志さんは、摘果や剪定、施肥などに試行錯誤を繰り返しながら、自分のミカン作りに挑戦されていた。そして、どんどんお百姓さんになっていき、本当にミカン作りを楽しんでおられたように思う。消費者からのアンケートに「美味しい」という感想があったり、農協で一番味が良いと評価されたことなど、ちょっと得意げに、とても嬉しそうに話しておられた時の笑顔が忘れられない。ゼミの夕飯に来てくださる時は、いつも缶ビールを持って現れ、大好きなビールを飲みながら、色々な話をしてくださった。決して前に出ることなく、でも自分の意見をきちんと伝えてくださる、生き方がスマートな方だったと思う。

尚志さんが居なくなって、芳樹さんの時代からこれまで、ゼミが調査を続けるために、いかにお世話になっていたかを思い知らされる日々が続いている。水のこと、ゴミのこと、悟の家の管理、などなど挙げればキリがないくらいお世話になっていた。今は、全て自分達で行うという課題をこなしながら、ミカン園での調査を続けている。

尚志さんが亡くなったのは、収穫時期を終えた後で、体調を崩されて受診をされていたとお聞きしている。思えば、昔はミカン園の作業は、兄弟や親戚が総出で行っていたが、今は全くそういう形はとれない状況になり、尚志さんが一人で１年間の作業をこなされていた。収穫作業だけは、とても一人では間に合わず、毎年アルバイトを雇って何とか乗り切っているような状況だった。収穫時期は相当無理をされていたのではないかと思うと、無性に辛い気持ちになる。でもそんなことは言ってられない。今年も尚志さんが残してくれたミカンを待っている人がたくさんいる。その人達にまたミカンを届けられるように皆で頑張りたいと思います。

尚志さん、本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈りします。

新たな生産者との出会い

河原田涼太

2017年末、仲田尚志さんが亡くなられ、我々は省農薬みかん園に後継者がいないという問題に直面しました。下津で農業を営んでおられる方も含めて尚志さんの親族の方々にはみかん園の管理をすることが難しいとのことでした。しかし、省農薬みかん栽培はなんとか続けていきたいという親族の方々や我々農薬ゼミの強い意志もあり、栽培を引き継ぐ人を探そうということになりました。農薬ゼミのOBOGの方々にも協力していただき、何人かの候補が見つかりました。その中の一人が大柿肇さんでした。

大柿さんと初めて会ったのは4月です。そろそろ後継者を見つけてみかん園の管理をきちんと行わなければ、今年度の販売はできないのではないかと危惧していたころでした。4月に一度みかん園の様子を見に来ていただきました。この時に大柿さんと話したところ、新規就農者だが農業を行って生きていく意欲や熱意を感じ、また省農薬というワードにも関心を持っておられました。尚志さんの親族の方とも話し合い、大柿さんに省農薬みかん園を引き継いでいただくことになりました。5月にはともに除草作業を行い、下津のみかん農家の方々も交えて年間の作業内容や、経済的な部分に関して具体的に詰めていきました。それ以降も農薬ゼミがみかん園に行く日はもちろん、それ以外の日にも個人でみかん園に足を運んでおられました。今までは尚志さんが栽培を行い、そのみかんの一部を農薬ゼミが販売するという関係でしたが、今後大柿さんとはこのような関係を基に、お互いにより協力しあえる関係を築いていきたいです。

大柿さんは農村地域交流にも関心を持っておられ、今までとは違った形で省農薬農業を伝えていくことができるのではないかと思います。まだまだ盤石な体制ではないですが、今年もみかんをお届けすることができました。今後も大柿さんとともに省農薬みかんを皆様にお届けし続けることを目指します。

農　森林科学科　4回　かわはらだ　りょうた

【大柿肇さん紹介】

今年度から省農薬ミカン栽培を引き継がれた、大柿肇（おおがきはじめ）さんをご紹介します。

News Letter挨拶文

大柿肇

はじめまして。この度、亡き仲田尚志様の跡を継ぐ事となりました大柿肇と申します。

苗字が大きな柿にもかかわらず、蜜柑栽培をする事には先祖も驚いていることでしょう（笑）

今回のご縁は今年３月に高知県四万十市で有機野菜農家の友人から「海南市でミカン農家を継ぐ人いませんか？」というＬＩＮＥから始まりました。私が娘の独立を機に昨年から和歌山県橋本市で野菜栽培を始めていたので、軽く相談程度のつもりであったように思います。

正直、ミカン栽培に特に興味があった訳ではありませんが、頂いた情報から、その背景にある省農薬栽培への取り組み、京都大学農薬ゼミとの40年以上に亘る人との繋がり等を聞くにあたり非常に興味深く、ふと「私自身がその後継者候補になれないか？」と友人に聞くようになりました。石田先生と交わした初めての電話は橋本市の畑で鍬を片手に持ちながら話した事は今でも鮮明に覚えています。そしてその電話の時には既に、鍬を収穫鋏に持ち替えてミカン農家になるイメージは出来ていました。少々の紆余曲折はありましたが、当初の電話から１ヶ月も経たない間に農薬ゼミメンバーと共に下津町大窪のミカン畑に行って私の決心は固まりました。

と、話は非常にスピーディーで順調ではありましたが、先にお伝えしお詫びしておきたい事が一つあります。やる気と体力は大いにあるのですが、農業学校へ半年ほど通い、農家さん指導の下で約１年弱の野菜栽培の経験しかなく、私の農業経験や知識は殆ど皆無に近い素人レベルであり、跡を継ぐといっても技量が伴わず品質や栽培量において不安な面やリスクが多々あると云う事です。その点においては皆様の寛大なる心の広さと長く物を見る目を僭越ながら頂かないとなりません。ただ、輸入卸売業とアパレル業において約20年間の会社経営経験、諸事情あって会社を閉鎖した後に独学で不動産の国家資格を所得して速やかに転職し管理職に昇進する等、前に向いた時の実行力には些かの自信は持っています。近い将来に仲田さんの後継者として胸を張って名乗れるように全身全霊をもって尽力する所存でありますが、未だ見通しが定まらない現状においては、皆様の応援が何よりの心の糧となりますので以前同様に今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、皆様と同じく私も石田先生と初代及び二代目の仲田親子や大窪住民との物語に感銘を受けた１人として、単に農作業を生業にするだけでは無く、三代目として環境整備は勿論、次期後継者育成も視野にいれ、この物語が未来永劫に継承される事を最大の目的として取り組んで参ります。未熟者ではありますが今後とも皆様の今までと変わらぬご協力と積極的な農薬ゼミへの活動参加を切にお願い申しあげます。

おおがき　はじめ

▲2018年9月20日、愛犬のかい君と

HP【下津きょうだいみかん山】

みかん山やこれからの取り組みについて紹介されているホームページです。

https://www.sk-mikanyama.com/

省農薬ミカンとは

和歌山県海南市下津町において、農薬をできるだけ減らした栽培方法（省農薬）で栽培したミカンです。

1967年7月14日和歌山県海草郡（現：海南市）下津町大窪で、当時17歳の松本悟さんが農薬中毒で急逝したことが省農薬ミカン誕生のきっかけとなりました。

悟さんは故松本武さん・エツ子さんの長男であり、省農薬ミカン園を拓いた故仲田芳樹さんの甥にあたりますが、害虫防除のためにフッ素系の農薬ニッソール（日本曹達株式会社（以下、日曹）製造販売、現在は製造中止）を散布したのち中毒にかかり、3日後に亡くなりました。悟さんのご両親は中毒の原因は農薬の安全性の問題であるとし、1969年にニッソールを製造販売した日曹と、それを許可した国を相手取って民事訴訟を起こしました。

当時は、高度経済成長のまっただ中であり、大量生産・大量消費が大きな価値であるという考えが大勢を占め、大量の農薬を使って多くの作物を作ることに何の疑問も抱かない時代でした。そんな時代背景の下、農薬会社と国を相手に損害賠償を求めた裁判は、77年和歌山地裁で完全敗訴となります。しかし、その後78年に大阪高裁に控訴し、84年の最終弁論のあと裁判所からの和解の打診があり85年に和解がなされ、日曹から和解金（賠償金と考えています）が支払われました。最後まで国の責任は問われませんでしたが、農薬会社が公に和解金を支払ったのはこれが初めてであり、大きな成果でした。17歳で亡くなった悟さんが、17年間の裁判をご両親と共に闘った結果でした。

さて、裁判を続ける中で芳樹さんが新しいミカン園を拓くことになり、農薬を使わずに栽培してみようということになったのが、省農薬ミカン園の誕生です。裁判を始めて5年後のことでした。

開園後2～3年でミカンの出荷が始まります。農薬ゼミが現行の調査を開始したのは78年からです。その当時のミカン園は、樹が枯れてしまうのではないかと思うくらい害虫がたくさん付いており、また雑草や土の問題もありました。農薬ゼミは、年に数回ミカン園に通い、夏と秋の病害虫調査を続けながら、試行錯誤を繰り返してきました。最も大きな成果は86年の天敵導入であり、これにより害虫は激減し、現在は本当に害虫が少なくなっています。

普通のミカン園では、年間に十数回の農薬散布が行われますが、省農薬ミカン園では可能な限り農薬を省いた栽培を続けています。ミカンの樹の寿命は、人間と同じくらいと言われていますが、最初に植えた樹は約40歳をすぎ、働き盛りです。収量は増え、味も良くなり、多くの方に省農薬ミカンをお届け出来るようになりました。

2017年12月仲田尚志さんが逝去され、新たに大柿肇さんとともに栽培を続けることに決まりました。今後も応援していただきますよう、よろしくお願いいたします。

このミカンを通して、日本の農業のあり方や食べ物のことを考えるきっかけにしていただければ幸いです。

NEWS LETTER vol.30 発行者：京大農薬ゼミ

〒606-8227

京都市左京区田中里ノ前町21 石川ビル305

TEL&FAX：075-711-4860

E-mail：noyaku@yahoo.co.jp

HP：http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP

Facebook：@noyakuzemi

郵便振替口座番号「01070-0-36598」

加入者「農薬ゼミ」

農薬ゼミHP はこちら